川村学園女子大学研究紀要　第12巻　第2号　55頁―67頁　2001年

イギリスのドラマ教育の考察（7）
―― TIEとDIEの検討を通して――

小　林　由利子*

Drama in Education in England (7):
Finding the Connection between TIE and DIE

Yuriko KOBAYASHI

Abstract

This paper analyzes the Educational program of Big Wheel Theatre in Education in England: "Breakfast With Big Wheel". This program has various drama activities and short performances: games, experts, adverts, farces, and surprises. The purpose is to clarify the characteristics of this program and find the connection between TIE (Theatre in Education) and DIE (Drama in Education) . The method is a case study. As the result there are seven characteristics: (1) Having fun, (2) Sense of closeness to the participants, (3) Sense of humor, (4) Improvising, (5) A Variety of activities, (6) Repetition, (7) Learning English with fun. Some activities will be able to be used for Drama in Education by a class-room teacher.

Key Words: TIE, DIE, TIE Program

Ⅰ．はじめに

教育課程審議会の答申を受けて，文部省は，1998年12月14日に幼稚園教育要領の改訂を行なった。教育審議会答申の改善のねらいは，「①豊かな人間性や社会性，国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること ②自ら学び，自ら考える力を育成すること ③ゆとりある教育活動を展開する中で，基礎・基本の確実な定着を図り，個性を生かす教育を充実すること ④各学校が創意工夫を生かし，特色ある教育，特色ある学校づくりを進めること」[1] という4

*助教授　ドラマ教育・演劇教育

点である。このようなことが求められるのは，現在，我々の「時代は本当に世界が近くなり，毎日，世界中の情報が即時に見聞きするだろう。一国の経済不況が世界経済を脅かし，環境破壊は地球人の生命を危機に陥れるというように，一つの国のありようが世界の国々に影響する地球時代を生きるのである。地球時代のコミュニケーションには，新たな英知が求められ，自分の考え，生き方が世界から問われる」[(2)] からであるといえる。このように地球人としての日本人が求められ，世界の人々と日本人がコミュニケーションしていかなければならないことは不可避の状況である。さらに，幼児教育において，このコミュニケーションの一つ道具としの英語をどのように捉え，「環境を通した教育」と「遊びを通しての総合的な指導」にどう位置づけていくかを考えなければならない。

そこで本論では，学習媒体としてドラマを用いてきたイギリスのDIE（Drama in Education）と演劇を用いてきたTIE（Theatre in Education）を取り上げて検討することを通して，幼児の英語教育を具体的にどのように考えていくかについてのきっかけにする。その第1段階として，従来対立的に捉えられてきた，DIEとTIEにおいて参加者との具体的活動において，共通部分があるのではないかと考え，TIEの具体的活動について考察する。

具体的な研究方法として，現在，実際にヨーロッパで実施されている英語教育を目的にしたイギリスのTIE劇団であるBig Wheel Theatre in Education劇団のTIEプログラムである“Breakfast With Big Wheel”という具体的活動例を取り上げて，その特徴を明らかにし，DIEとの共通点を明らかにする。

Ⅱ．イギリスのDIEとTIEについて

DIEは，観客に見せることを目的とした演劇と異なり「子どもたちにとっての，何かを発見する旅であり，様々な出来事を提供する場であり，人生や日常生活を学習する場である」[(3)] といわれている。つまり，DIEとは，ドラマを行なう過程自体に教育的意味を見出している活動である。一般的に，ドラマ活動は，ドラマ教師あるいはクラス担任教師によって導かれる。

一方，TIEは，1965年にイギリスのコベントリー市立Belgrade Theatreのプログラムの一つとしてBelgrade Theatre TIE Companyが創設された。そして，TIEは，1960－70年代にかけて爆発的にイギリス全土に広がっていった。しかし，1980年代に入ってから，徐々に活動は政治的色彩を強めていったために，TIE劇団数は下降線をたどり，現在は，いくつかのTIE劇団を残すのみとなっている。しかし，TIEに含まれる要素は，形態を変えて現在のイギリスのドラマ教育，演劇教育，児童演劇の中に存在していると考える。

Chris Vine は，TIE を演劇形態のための包括的用語として捉え次のように定義づけている。

> TIE の演劇形態は，“教えること（teaching）と演劇（theatre）について，熟練された技術と方法論との両方を兼ね備えている専門家によって提供されるものである。TIE は，主に学校の中で上演される。しかし，児童館（youth clubs）や大学や劇場や他の公共施設でも上演される。上演する人たちは，伝統的に“actor-teachers”と呼ばれている。観客は，一般的に5歳から19歳までの中から特定の年齢層が選び出される。大部分の劇団は，ある特定の地域の観客と密接にかかわりながら仕事をしている[4]。

従って，TIE は“actor-teachers”と呼ばれる教育と演劇の専門知識と技術をもったグループによる，地域に密着した学校巡回公演と子どもたちの参加型ドラマ活動を含む教育的活動といえる。ここでドラマ活動とした理由は，TIE におけるこの活動が，観客に見せることを目的にした活動ではないからである。このことから，TIE の一連の活動の一部である子どもたちの参加型活動は，DIE で行なわれている活動と共通しているのではないかと考える。

DIE と TIE との大きな相違点は，DIE がドラマ教師あるいはクラス担任教師によって導かれるのに対して，TIE はプロの劇団の“actor-teachers”によって導かれることであると考える。そこで本論では，現在行われている英語教育を目的にした TIE の一連の活動におけるドラマ活動例を取り上げて検討することを通して，現在の TIE と DIE との共通部分について明らかにしていく。

Ⅲ．ドラマ活動の考察

1. 方法

観察対象は，平成12年8月3日13：00から17：00まで行われたイギリスの TIE 劇団の一つである BIG WHEEL Theatre in Education の初心者向けワークショップである。今回のワークショップは，“Breakfast With Big Wheel”というランゲージ・ワークショップである。この TIE プログラムは，11－15歳と初心者の大人を対象にしている。今回，観察した活動は，特に TIE についての初心者を対象にしている。具体的には，子どもにかかわっている教師，アートマネージャー，コミュニティーワーカー等である。演劇形態は，「よく知られているテレビの『バラエティー番組』のフォーマット」[5]を使用している。

観察方法は，参与観察法を用い，活動終了後にフィールド・ノートをつける方法を使用する。

TIE 劇団の“actor-teachers”は，2名（男女各1名）で，ワークショップ参加者は15名である。ワークショップの実施場所は，国立オリンピック記念青少年総合センターである。

2. ドラマ活動例と考察

このワークショップは，短い活動が組み合わされ一連の活動となるように構成されている。全体としては，3時間の活動であるが，今回は，一連の活動から一部を抜粋して考察することにする。

(1) 活動例1：オープニング

＜活動記録の抜粋＞

参加者は，ワークショップ参加の受付をすませ，名札にローマ字で自分の名前を書き胸につけ，廊下に置いてある椅子に腰掛ける。廊下で入室を待っている参加者一人ひとりに“actor-teachers”の一人であるシャーリーがパジャマとガウン姿で近づいてくる。まず，シャーリーが胸に付けている名札を差しながら「こんにちは，わたし，シャーリー，あなたの名前は？」と尋ねる。参加者は，あいさつをした後，自分の名前を言いながらシャーリーと握手をする。

＜活動例1の考察＞

これは，活動の導入部分である。ワークショップが実施される部屋の廊下に行くと，パジャマの上にガウンを着て胸に大きく「シャーリー」と書かれた名札を付け，参加者と英語で話しながらボードを持ちながら何か書き込んでいる女性がいることに驚かされる。何をしているんだろうと興味を持って思わず参加者が，観察してしまうような状況になっている。衣装としてガウンとパジャマを着ているので，一目見た瞬間から日常と異なる世界に参加者を導きいれるきっかけになっていると考える。言いかえると，劇的世界に入りましょうと言わずに，参加者をこの世界に引き込んでいる。

“Breakfast With Big Wheel”という TIE プログラムの“actor-teachers”の一人であるシャーリーは，参加者が恥ずかしがったり，躊躇したり，どぎまぎしているのを受け止めながら，自分から明るい声と雰囲気で参加者に気軽に話しかけるようにしている。必ず笑顔を浮かべて握手を参加者に求めながら，片手を差し出し“Hello！”と挨拶をしている。参加者は，思わず「ハロー！」と反応してしまう雰囲気と間があると考える。さらに，シャーリーは，参加者一人ひとりに話しかけているので，シャーリーと対話していない参加者は，彼らのやりとりを観

察する機会をもつことができる。言いかえれば，「ああ，こうすればいいのか。」，「自分に話しかえられたら，こう答えよう。」，「明るくハローと言ってみよう。」などとあれこれ考える時間を参加者は得ている。

このように活動は，廊下における待ち時間から始っているのである。

(2) 活動例２：アンケート調査

＜活動記録の抜粋＞

シャーリーは参加者とあいさつしするとすぐに，「みんなに朝食についてアンケートを取っているんだけど，きょうの朝，何を食べたかしら。」と言う。シャーリーは，その時，文字の書かれたボードを見せながら参加者に話しかける。参加者は，「ごはんと味噌汁，それから納豆とのり。」，「パンとコーヒーとハムエッグ。」などとそれぞれが今朝食べたものを言う。シャーリーは，参加者が言った言葉をアンケート用紙に記入しながら，参加者に合わせて次のような質問をする。たとえば，「味噌汁の具は？」，「パンにバター塗った？ジャムは？」，「他に食べたものは？」，「納豆って何？説明してくれる？」，「飲み物は，何か飲んだ？」などである。アンケート調査の途中で部屋の中の準備ができているかを確かめに行く。少したって，また廊下に戻ってきて朝食のアンケートの続きを行なう。全員にアンケート調査をした後で，ドアの前に参加者を並べさせて，中に入っていく。シャーリーが，先頭に立ち部屋の中に入っていく。

＜活動例２の考察＞

シャーリーは，「ハロー！」とあいさつしてから，すぐに今朝の朝食に何を食べたかを参加者に聞いている。この間を開けずに質問をすることが，参加者を活動にスムーズに導きいれるテクニックである。つまり，参加者が思わず答えてしまう状況をつくりだすことである。この状況が，現実世界から劇的世界，言いかえれば想像世界に入るときに生じる葛藤を感じさせない働きをしていると考える。

シャーリーが実際にアンケート用紙を持ち，参加者の解答を書き込むことを通して，参加者は，TIEのワークショップとどのような関係があるかわからないが，シャーリーがアンケート調査をしていることについて，「リアリティ」を持って経験できる。従って，実際自分が食べた朝食の内容についてまじめに解答している参加者がほとんどであった。さらに，シャーリーが，詳細な朝食の内容を知るために質問をすることで，参加者はさらにその状況に深く入り込

んでいく。同時に，参加者が，シャーリーに対して徐々に親近感を感じる機会にもなっている。つまり，劇的状況に信憑性と信頼感を参加者が抱く活動になっている。従って，ワークショップ会場のドアの前に参加者が並んだときは，シャーリーと参加者一人ひとりとが，ある種の親しさを感じる状態になっていると考える。

(3) 活動例３：自己紹介

＜活動記録の抜粋＞

もう一人の“actor-teachers”であるローランドが，コの字型に並べた椅子の一つにパジャマ姿で新聞を広げながら座っている。参加者が入ってくると，軽くあいさつをして，また新聞に目を向ける。

二人の“actor-teachers”は，インフォーマルな自己紹介をする。参加者も簡単な自己紹介をする。

シャーリーが，参加者をリードしながら活動を進める。ローランドは，「シャーリー，次は何かわかってるかい。」，「今の説明，わかりにくいよ。」などシャーリーにときどき意見や質問をする。一方，ローランドは，参加者に「元気？」，「名前は？」，「この新聞記事おもしろいよ。見て。」などとシャーリーの活動の進行を無視して，参加者に話し掛ける。ローランドは，参加者全員のとなりに座り，話し掛けるようにしている。ローランドの行動に対して，ときおりシャーリーは，「わかっているから，静かにして。」，「話をちゃんと聞いて。」，「もう，やめなさい。」などの応答をローランドにする。ローランドは，「はい，はい。ごめんなさい。」と言うときもあるし，隣りに座っている参加者に「ねえ，いちいちうるさいよね。」などと同意を求めたりする。

＜活動例３の考察＞

参加者は，これから何が始まるのだろうかという期待感を持って部屋に入っていく状態になっている。一人の60歳前後の男性参加者が，見学だけしたいとコの字型の椅子に座らずに少し離れたところに座ると，シャーリーがそばに行き，「何もしなくていいから，向こうの席に座りませんか。」と誘いかえる。しかし，彼は頑強に動こうとしなかったので，何度か誘った後に，そのままにしておいた方がいいと判断して，シャーリーは活動に戻っていく。TIEの活動において，第３者が観察者として存在することで，参加者にプレッシャーを与えたり，見られていると意識してしまったりすることが生じる。従って，このような活動においては，全員が参加者であることが重要なポイントになる。

ローランドが，リラックスした雰囲気で参加者に彼の方からあいさつをすることによって，参加者は緊張感からさらに解放されていくと考える。ローランドは，ブランケットを持っており，両隣りに座った参加者を中に入るように誘い，シャーリーを無視しているようにして彼らと雑談を始める。話題は，手に持っているスポーツ新聞の記事である。つまり，ブランケットや新聞が，参加者との距離を縮める役割をしている。ローランドは，ひとしきり両脇の参加者二人と談笑すると，次の場所に移動し同様な行動をする。このようにしてローランドは参加者全員と話をする。これは，方法は異なるがシャーリーが，参加者にアンケート調査をしたことと同じ目的がある。つまり，参加者と“actor-teachers”との親近感をつくりだす。参加者にとって何かを人前で表現することは，ある種の恐怖感や緊張感が伴うことである。従って，グループ内の信頼関係を徐々に積み上げていくことは，ドラマ活動において重要なことである。

ローランドは，一見シャーリーの進行の邪魔をしているように見える。しかし，観点を変えればシャーリーのしていることに異なる視点から示唆をして，活動を活性化しているともいえる。参加者は，二人が本当に口論をしているのではないかとハラハラドキドキするような経験をする。この状況は，二人が参加者を劇的空間に導き入れている証明ともいえる。つまり，ローランドは邪魔したり，からかったりするやり方でシャーリーのリーダーとしての役割をサポートしているのである。この関係は，ドラマ教師が一人で活動をリードする場合と明らかに違い，例外的とも言えるがTIEの“actor-teachers”というグループ集団が導く活動という特徴を顕著に示している。

(4) 活動例4：おむつのコマーシャル・タイム

＜活動記録の抜粋＞

全員自己紹介を終えたところで，ローランドがカセット・テープレコーダーを操作している。突然大きな音がしたりすると，シャーリーが，「大丈夫？ローランド。壊さないでよ。」という。ローランドは，「大丈夫，大丈夫，心配しないで。ぼくに任せて。」と応える。

音楽がなりだし，シャーリーとローランドが，今までの役を演じるのを止め，参加者の前に出て，布を三角にしたものを腰に巻きつけ，指をくわえて乳児の真似を始める。二人は，音楽に合わせて踊り出し，録音テープの声に合わせて，口を動かし，自分たちが話しているようにする。音楽が，終わると，衣装を取り去り，もとの場所にもどり，ワークショップの中で演じているシャーリーとローランドの役にもどる。

＜活動例４の考察＞

一つの活動が終了したところで，急に予期しない音楽がかかり始め，突然“actor-teachers”の二人が後ろ向きになり，大きな正方形の白い布を三角形に折りおむつのように腰に巻きつけ指をしゃぶりながら振り向いたときは，参加者はどのように反応していいか戸惑いを見せている。そのような様子にも動じず二人は，おむつのコマーシャルが録音されたテープに合せて踊り始め，セリフのところは口まねをしている。参加者は，あっけに取られていたが，徐々に二人の動きのおかしさや，表情のおもしろさに反応し始める。参加者の中には，涙を流しながしながら笑っている参加者もいる。このようなことを通して，参加者に劇的空間では何をしても構わないというメッセージを送っていると考える。言いかえれば，成熟した大人でありプロである“actor-teachers”がたわいもなく，おかしなことを真剣に演じているということを通して，参加者の中にある羞恥心や躊躇する気持ちを軽減しようとしている。特に，Big Wheel TIE 劇団の TIE プログラムは，この視点を強く持っているように考える。一方で，ある種の日本のテレビ番組で一世を風靡した「8時だよ，全員集合！」に見られた雰囲気を醸し出す傾向も見られる。つまり，野卑な表現を使って笑い取ることである。これは，前述した活動例２のブランケットにも見られると考える。しかし，確実に参加者から笑いを引き出すという点では，効果的な方法であるともいえる。また，次の活動に移行するために雰囲気をがらりと変えるために効果的であるとも言える。シャーリーとローランドは，故意にこの手法を使っていると考える。

(5) 活動例5:ブレックファースト・ゲームの説明

＜活動記録の抜粋＞

シャーリーは，参加者を座っている位置から２つのグループに分ける。シャーリーとローランドは，マジックテープで貼りつけられるようになっているボードを２枚出して，ブレックファースト・ゲームのやり方を説明する。ゲームのやり方は，各グループから４名が前に出てきて，自分の好きな衣装や小道具を選び身につけ，紐で首から下げるようになっているボードを選び，その役割になる。衣装や小道具は，奇妙な帽子，カラフルなかつら，バッグなどである。役割は，「DAD（父）」，「MOM（母）」，「SON（息子）」，「GRAN（祖母）」の４つである。男性が，母を演じても，女性が父を演じても構わないとシャーリーが説明する。

ローランドは，空気式のラッパを持って，ボードの向かい側に座る。そして，朝食に

関係するクイズを出す。「たとえば『ティーバックに入っているものは何ですか。』という質問を聞いて，わかったら，音楽がかかり始めるのを待って，かかったら急いで駆け出して，このラッパを鳴らす。慣らした人が，答えを言うことができます。確認ですが，音楽を待たなければいけませんよ。」とローランドが説明する。シャーリーが，実際に動いてみて「紅茶の葉っぱ。」と答える。シャーリーが，「正解の場合は，このボードに朝食で食べるものをはりつけます。パンとベーコンと卵と紅茶の4枚がそろったチームが勝ちです。」と説明しながら，実際にボードに4枚を貼りつけて見せる。

＜活動例5の考察＞

二人の“actor-teachers”は，絵やアクションを使ってゲームを英語で説明する。通訳はいるが，明確な英語を話しながら具体物（絵が書かれたカード，ラッパ）とアクションを使っているので，参加者は英語がわからなくても彼らを理解できる。彼らの方法論と実践は，英国以外のヨーロッパを中心に第2外国語として英語を教えるためのTIEとして巡回公演している中で積み上げられてきたものであるということである。

衣装や小道具が，奇抜なものを選んだのは，活動例4と同様な理由であると考える。さらに，クイズの答えを間違えても，解答者に当たっても，参加者が，気にしないためであると考える。つまり，笑いで羞恥心を軽減させようとねらっていると考える。また，二つのグループに分れて4人づつが舞台に着席したときに，他の参加者が彼らを見て興味を持って見ることができるからであると考える。特にこの劇団は，笑いを使いながら，英語に触れさせるように考えている。さらに，おもしろかったという経験が，参加者の記憶に残るからである。つまり，興味を持って演じている，見ているということである。

朝食に特徴がある英国の文化を触れる機会にもなる。おもしろおかしく文化を体験できるのである。さらに，朝食もメニューの名前を英語で覚えることもできる。

(6) 活動例6：ブレックファースト・ゲーム

＜活動記録の抜粋＞

シャーリーが，「では，ゲームを始めましょう。」と言って，各チーム4名づつのメンバーの名前を言う。名前を呼ばれた参加者は，前に出て衣装と小道具を選び，役割の名前が書かれたボードを選び首から下げ，舞台に用意された椅子に座る。各チーム4名が，

所定の場所についたところで，シャーリーが，クイズを出す。たとえば，「サラミは，英語で何といいますか。」「ベーコン＆○○○は，何ですか。」，「デーニッシュ・ベーコンのある国は？」などという質問を英語で行なう。もし，解答者が間違えたら，もう一方のチームが答える，正解したら，ボードにカードを貼ることができる。両チームとも解答できなかった場合は，観客として見ている参加者に尋ねる。それでも，解答が得られなかった場合は，シャーリーが正解を伝える。どちらかのチームがボードに4枚のカードがそろったら，ゲームを終了し，次のゲームへの参加者8人をシャーリーが選び，同じことを繰り返す。参加者が，全員ゲームをするまで繰り返す。

＜活動例6の考察＞

勝ち負けのあるゲームの形式は，演技者にとっても観客にとっても注意をゲームに自然に向かせる。言いかえれば，「ゲームに集中しなさい。」と言わずに，ゲームに集中させることができる。そして，朝食に出てくる4つメニューを全部揃える必要があるので，繰り返し高揚感のある山場を演技者も観客も繰り返し経験できる。つまり，劇的瞬間を伴ったサスペンスを体験できる。

クイズに解答するという形式により，参加者は新しい知識と英単語を楽しみながら学習できる。言いかえれば，知らず知らずの内に英語の学習をしていることになる。TIEの形式は，机の上で行なう英語の授業と異なり，身体と言葉を通して英語を学習できる機会を提供する。まず，英語が楽しいという印象を参加者に与えることができると考える。

一回のゲームの中に繰り返しがあるが，メンバーを変えてゲームを行なうので，ここでも繰り返しがさらに行われる。従って，朝食のメニューの単語は，何回も聞いたり，言ったりするとになる。このような方法で，参加者は新しい英単語を獲得できるのである。

(7) 活動例7：エクササイズ・マン登場

＜活動記録の抜粋＞

ブレックファースト・ゲームが終了すると，突然エクササイズの音楽がかかり，シャーリーとローランドが，パジャマを脱ぎ捨てて，エイクササイズのウェア姿になり，参加者の前でエクササイズを始める。参加者が，あっけに取られていると，エクササイズ・マンになったローランドが，いかにエクササイズが大切で，毎日エクササイズをす

ることにより，自分のような引き締まった筋肉質の体をもつことができるということを参加者に説明する。参加者全員も立って，エクササイズ・マンを見ながら一緒にエクササイズをする。音楽が終わると，シャーリーとエクササイズ・マンを演じていたローランドは，脱ぎ捨てたパジャマを拾い，もう一度着る。そして，次の活動を始める。

＜活動例7の考察＞

この形式は，おむつのコマーシャルと共通している部分がある。“actor-teachers”が，参加者に短い劇を見せるところは同じである。エクササイズ･マンでは，その次に参加者にもエクササイズを一緒に行なうように導いている。これも次の少し長い活動を行なうためのつなぎの役割を担っている。このような活動は，参加者の雰囲気を変えるのに効果的であると考える。やはり，前述したように野卑なやり方で参加者を驚かせるているのではないかという疑問が残る活動である。確かに参加者は，笑っているがその笑いの質に関しては，検討される必要があると考える。

(8) 活動を通しての考察

一連の活動からBig Wheel TIE劇団は，演劇（theatre）を何かを教えるための媒介にしていることである。演劇そのものや演技力を参加者に教えることを目的にせず，参加者が演劇を通して何かを学習することを活動の目的にしている。“Breakfast With Big Wheel”では，英語を楽しく学習することをねらっている。

このTIEプログラムは，従来のTIEとは異なり，ある特定の地域と密接につながったテーマを持っていない。あくまで，演劇を媒介にして，第2外国語を学習することをテーマにしている。1960年代から1970年代にのいては，TIE劇団にはこのような活動は見られなかった。1990年代から徐々に見られるようになってきた考える。言いかえれば，1990年代からTIE本来の姿が変容して，児童演劇劇団やBig Wheel TIE劇団のように，TIEのアイディアを使いながら特定の地域に限定しない活動が増えてきたといえる。これは，イギリスのナショナル・カリキュラムの影響や1980年代に急速に左翼化していったTIE運動の流れの影響もあると考える。

Big Wheel TIE劇団の“Breakfast With Big Wheel”で使われた方法の特徴は，次のことがあると考える。第1に，楽しい活動をめざしていることである。第2に，“actor-teachers”は参加者に親近感を持たせるように工夫していることである。第3に，笑いの状況をできる限り設

定していることである。時には，野卑とも言えることも行なっている。第4に，参加者が思わず行なってしまうような状況をつくり出そうとしていることである。第5に，長短の活動を組み合わせ，バラエティーに富んだ活動を実施していることである。第6，繰り返しがあるようにしていることである。これは，主に英単語の学習のためである。第7に，知らず知らずの内に英語を学習できるようにしていることである。この劇団のTIEのプログラムは，従来のプログラムは深刻になりがちの傾向があるが，このプログラムはあくまで楽しく行われるところに最大の特徴があるといえる。

上記のことは，クラス担任が教室で子どもたちとドラマ活動をするときにも使用できると考える。言いかえれば，TIEで行われる活動は，教室でクラス担任のリードによって行われるDIEのドラマ活動にも応用できる活動であると考える。従来，対比的に捉えられてきたTIEとDIEは，その中で行われる活動として共通する部分があるといえる。

Ⅳ．おわりに

今回は，Big Wheel TIE劇団の“Breakfast With Big Wheel”の活動の検討を通して，その特徴と，TIEとDIEの共通点を明らかにした。今後は，現在実施されているDIEの活動を取り上げて考察していきたい。

註

(1) 文部省，『幼稚園教育要領解説平成11年6月』，フレーベル館，1999, p. 3.
(2) 青木久子・磯部裕子・大豆生田啓友，『教育学への視座—教育へのまなざしの転換を求めて—』，萌文書林，1999，p. 153.
(3) Davis, Jed H. & Evans, Mary Jane., *Theatre, Children and Youth*, New Orleans: Anchorage Press, 1987, p. 34.
(4) Vine, Chris., “Theatre in Education.” *Participatory Theatre: A Model in Theamaking*. N.p., n.p., 1993, N. pag.
(5) “BIG WHEEL theatre in education”, 2000, p. 1.

参考文献

Adland, David., *The Group approach to Drama 1*, London: Longman, 1964.

Adland, David., *The Group approach to Drama 2*, London: Longman, 1964.

Adland, David., *The Group approach to Drama 3*, London: Longman, 1964.

Adland, David., *The Group approach to Drama 4*, London: Longman, 1964.

Allen, John. *Drama in Schools: Its Theory and Practice*, London: Heinemann Educational Books, 1979.

Bolton, Gavin. *Gavin Bolton: Selected Writings*, David Davis and Chris Lawrence ed., London: Longman, 1986.

Harters, Jill and Anne Gately. *Drama Anytime*, Maryborough: Primary English Teaching Association, 1986.

Courtney, Richard. *The Dramatic Curriculum*. New York: Drama Book Specialists Publishers, 1980.

Courtney, Richard. *Play, Drama & Thought: The Intellectual Background to Drama in Education*, New York: Drama Book Specialists Publishers, 1968.

Cranston, Jerneral W., *Transformations through Drama: A Teacher's Guide to Educational Drama, Grades K-8*, Hanham: University Press of America, 1991.

Haseman, Brad and John O'Toole, *Dramawise: An Introduction To the Elements of Drama*, Port Melbourne, 1986.

Heathcote, *Dorothy. Dorothy Heathcote: Collected Writings on Education and Drama*, Liz Johnson and Cecily O'Neill ed., London: Hutchinson, 1984.

香川良成，「イギリスの演劇教育」，『"演劇と教育" 研究報告集』，日本演劇学会「演劇と教育」研究会，1994.

Kase-Polisini, Judith. ed., *Children's Theatre, Creative Drama & Learning*. New York: University Press of America, 1986.

片岡徳雄 編，『劇表現を教育に生かす』，玉川大学出版部，1982.

Kase-Polisini, Judith.,ed., *Creative Drama in a Developmental Context*. New York: University Press of America, 1985.

Koste, Virginia Glasgow. *Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life*, New Orleans: The Anchorage Press, 1978.

MaCaslin, Nellie. *Creative Drama in the Primary Grade: A Handbook for Teachers*. New York: Longman, 1987.

MaCaslin, Nellie., ed., *Child and Drama*, second ed., New York: Longman, 1981.

McGregor, Lynn., Maggie Take and Ken Robinson., *Learning Through Drama: School Council Drama Teaching Project*（10－16）, London:Heinemann Education Books for the Schools, 1977.

岡田陽，『子どものための表現活動』，玉川大学出版部，1994.

岡田陽，『ドラマと全人教育』，玉川大学出版部，1985.

O'Neill, Cecily and Alan Lambert. *Drama Structures: A Practical Handbook for Teachers*, Portsmouth: Stanley Thornes Ltd., 1990.

Pemberton-Billing, R.N. and J.D.Clegg, *Teaching Drama*, London: Hodder and Stoughton, 1965.

Slade, Peter. *An Introduction to Child Drama*, London: Hodder And Stoughton, 1958.

Warren, Kathleen. *Hooked on Drama: The Theory and Practice Of Drama in Early Childhood*, Waverley: Macquarie University Institute of Early Childhood, 1992.

Way, Brian. *Development through Drama*, Altantic Highlands: Humanities Press, 1967.

Way, Brian. 岡田陽・高橋美智 訳，『ドラマによる表現教育』，玉川大学出版部，1977.